重商制成功者の上流社会に対抗するが参入も図る自由貿易論者の パラディオ風/ロココ風ゴシック

PALLADIAN/ROCOCO GOTHICK OF FREE TRADERS AGAINST AND FOR FASHIONABLE MERCANTILISTS

岡田 和正*, 田辺 健雄**, 鈴木 一***

Kazumasa OKADA, Takeo TANABE and Hajime SUZUKI

Mercantilists formed a close league with free traders by sucking them up to new "Gentleman" class, and ruled England in the interests of the commerce and the Empire. Transformation of the architectural taste was continuously and finely graded as the English social order was. Snobs of free traders, who were looking for an adventurous advance into new worlds, inherited the idea of Palladianism and shared so called "Gentleman Culture". They mix the Palladian and the Gothick taste to make Palladian Gothick.

Rococo was agreeable for free traders who had strong bent for going to the expense of acquiring "surveyable wealth". Decorated Gothick reminds snobs of a pleasant success story, namely promotion to be "Gentleman" class, of Middle Ages merchants. They mixed the freedom and universality of Rococo, and Englishness of Decorated Gothick to make Rococo Gothick. Then, Palladian / Rococo Gothick became a status symbol for newly born gentlemen of free traders.

Keywords : *Free Traders, Mercantilists, Palladian Gothick, Rococo Gothick, Snobisme*

自由貿易論者, 重商制成功者, パラディオ風ゴシック, ロココ風ゴシック, 上流気取り

1. はじめに

18 世紀英国ゴシック (Gothick) 建築の中に、パラディオ主義の反ロココ的、合理的・道徳的風潮の受容を主題としてゴシックの構成要素を古典的な規則に従って意匠的に構成したパラディオ風ゴシック (Palladian Gothick) ¹⁾、およびフランス・ロココの自由奔放な気質・精神と国際性を主題として英国伝統のゴシックを意匠的に構成したロココ風ゴシック (Rococo Gothick) ²⁾ と呼ばれる様相がある。それらの流行を三つの時代に分けて考察しよう。ひとつは 1733 年頃から 1753 年頃にかけての前期、もう一つは S・ミラーや H・ウォルポール等アマチュア建築家が活躍した ³⁾ 1753 年頃から 60 年代までの中期、最後は R・アダム等の手になる "Castle Style" のカントリー・ハウスが登場する 1760 年代 ⁴⁾ 以降の後期である。本稿では、紙面の都合で、前期のそれを取り上げる。

パラディオ風/ロココ風ゴシックは、Gentleman's Magazine が出版される (1731) など、好古趣味が教養あるジェントルマンの素養の一部であると認められつつあった頃、ウィリアム・ケント等が中世に始まったゴシックの伝統を漠然と認識しつつ空想力によって生み出し発展させたものである ⁵⁾。それは、後に バッティ・ラングレー等により分類・体系化され ⁶⁾、Kent-Langley 期のゴシックとしても分類されている ⁷⁾。それらの様相は、ホイッグ系ジェントル

マン社会における、本来の身分や地位より「ちょっと上流」の奢侈的な生活様式を真似る消費競争——その激しさは、英国人の上流気取りあるいはスノビズム (snobisme) ⁸⁾ と外国人からかわれた——を凌ぎ、その時代に新たに「ジェントルマン」階級に吸収されていったシティの商人や金融資本家および彼らに同調した専門職 (profession) 等社会の中核となっていた人たち (以下自由貿易論者という) に愛好された。ここでは、ジェントルマンへの階級上昇願望の成就を巡る、自由貿易論者の、重商制成功者に対する接近・同化と対抗という経済社会史の分析によって、それらの流行の原因を解明し、意味付けをする。

それらの様相は、自由貿易論者が「ジェントルマン」への階級上昇願望を成就した象徴として、ヴィラや住宅あるいは神殿などの庭園建築物に用いられた傾向が強い。と同時に、18 世紀英国ゴシックは、国民を植民地獲得戦争へと駆り立てるべく愛国的感情を昂揚させるための象徴としての要素、崇高・廃墟趣味等の要素も混在している。そのため、それは総合的に解明されなければならないが、ここでは、新しい「ジェントルマン」たちのステイタス・シンボルと見做されていた要素についてのみまとめ、他は別の論文で検討する。

尚、引用文中の二重括弧《 》は、読者がその前後関係を理解できるようにした筆者の補筆である。

* 武蔵工業大学工学部建築学科 非常勤講師

** 武蔵工業大学工学部建築学科 助教授

*** 武蔵工業大学工学部建築学科 教授

Part-time Lecturer, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Musashi Institute of Technology
Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Musashi Institute of Technology
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Musashi Institute of Technology, Dr. Eng.

2. 重商制成功者と自由貿易論者の協調と対抗

18世紀はじめ、英国は重商主義的経済システム（以下重商制という）を成功させる。と、同時にそれは停滞を始める。その重商制に生活の基盤をおいていたのが、伝統的な大地主で既に政治的・経済的・社会的に圧倒的な支配階級となっていたホイッグ系の大地主・大商人たち、即ち「ジェントルマン」階級の人たち（以下重商制成功者という）である。彼らは、富と権力を同じ階級・党派の仲間の間に集中させてホイッグ党を組織し、土地以外の利害を奉ずる人々、例えば「ジェントルマン」としての生活様式を維持し、その価値観を引き継いでいたシティの金融資本家、帝国各地に展開した軍人・官僚などの専門職、対外的にすこぶる積極的・野心的な活動を要求する立場にあった商人等自由貿易論者の上流指向者（snob）に対しても、「ジェントルマン」への階級上昇の門戸を広く開けておく等腐心して協調を図り、主として重商制商業と帝国の利益にそって英国を寡頭支配していた。

重商制成功者の次・三男坊たちは、フランスなど大陸諸国の貴族のそれらとは違って、地主という自分の生まれに固執しようとはせず、官職、陸軍、法曹界、工業、商業等で一財産つくるために家をあとにした。その事実上、こうした土地以外の利益を奉じる人々とホイッグ党との協調を促すに有利な条件として働いた⁹⁾。

与党ホイッグの首相サー・ロバート・ウォルポール（以下サー・ロバートという）は、ステュアート王朝復活という意味の反革命に対する恐怖から、内政における穏和政策と、国外に対して平和と、野心的な事業を抑制する政策を採る。しかし、その政治は、頹廃¹⁰⁾を助長する一方で、自由貿易論者との経済的利害衝突等を惹起する。パラディオ主義が盛んであった1733年、密貿易（自由貿易）を取り締まるべく主流派のサー・ロバートにより上程された国内消費税法案を巡って議会が紛糾する。コバム子爵は、組織的反対運動に加わったために、サー・ロバートにより官職を迫放される。コバム子爵は、サー・ロバート等の政治に異を唱えていた第三代バーリントン伯等、パラディオ主義陣営の大勢のホイッグ不平等地主・貴族たちと共に、自由貿易論者に同調して党内の反対派へ鞍替する。バーリントン伯等がパラディオ風建築と自然主義の風景式庭園の美をもってホイッグ・ジェントルマンの理想を説く一方で、コバム子爵は、バーリントン伯の保護の下パラディオ主義陣営の建築家・造園家であるウィリアム・ケントと共に庭園建築物の建設に着手し、パラディオ主義の受容と自由貿易論者の支持を視覚的に表現する。同年、サー・ロバートの政府の財務官でありながら、反対派の頭目的存在でもあり自由貿易論者でもあったH・ペラムは、パラディオ風／ロココ風ゴシック様式を始める。

重商制成功者はホイッグの主流派と反対派の二派に分かれて政権を争う。自由貿易論者は、重商制には反対だが、前者のサー・ロバート内閣を打倒すべく後者と手を組む。そして、ジェントルマンへの階級上昇願望の成就を狙う。

3. ジェントルマンへの階級上昇願望の成就

英国社会は、ジェントルマンの第1階層たる爵位をもつ貴族、ジェントルマンの第2階層のジェントリ（地主）、中産層としての市民等、そして第4階層の貧民大衆の4つの階層から成る¹¹⁾。第1と第2の

階層が、「ジェントルマン」と呼ばれる事実上同一の社会層に属している。ジェントリは、身分的には平民であるが、貴族とふつうに通婚し、食卓を共にするなど、いわゆるジェントルマン文化を共有していた。更に、支配階級としてのこのジェントルマン層が、第3の中産層に対しても開かれていたことは先述したとおりである。そして、4つの階層の内部には数十にもものぼる階層がなだらかに連続して積み重ねられていた。

経済的成功とそれに続く頹廃、およびサー・ロバートの統治は、社会的な序列（social order）に関わる諸問題にも大きな変化をもたらす。ホイッグ系大地主（当時はその二代目ない三代目が継いでいた）は、重商制で成した富をもって、農業経営規模の小なるがための採算悪化の故に隣人たちが売り出していた土地を買い集めて大土地所有者となり、「俄か成金（nouveau riches）¹²⁾」からジェントルマンへの階級上昇願望を既に名実共に成就させていた。

一方、中央政府と結びついていた重商制成功者の次・三男たちも、農業以外の職業によって一財産成し、主に邸宅用に土地を新規に購入し¹³⁾、地主（ジェントルマン）層へ参入していった。上流階級と下層階級の中間の、いわゆる中産階級が勢力を増し社会の中核へとなっていった。次・三男たちが一財産成した理由は多様だが、英仏間の激烈な世界商業戦争における英国の勝利により、ある種の俄か成金——戦費調達のために発行された国債を保有しその利息で収入を図る人々、軍の御用商人、軍人出身の地主・貴族など——となった人も多かった¹⁴⁾。

以上の変化に伴い、社会的な地位を決定する要素は「経済力」の大小から教養度の同一と所属員の世界観の連帯性という二点に絞られた¹⁵⁾。消費に関する身分的な制約は殆どなくなっていたので、逆に、人がどんな生活をしているかが問題となる。ジェントルマンと認められるための資格・条件は、もちろん血統の良さ、「家柄」も重要視されていた。が、そうした「生まれ良きジェントルマン」に代わって、第3の階級から階級上昇に成功した「育ち良きジェントルマン」が大幅に勢力を伸長しつつあった。富者の「奢侈的な消費」が新たな需要を呼び、それが社会発展の原動力になると論じられ、ジェントルマンの行なう経済的な美德として正当化されていた。そのため、大地主たちは、所有者の人格と社会的な身分を最も明確にかつ強力に象徴するという意味での目に触れる富、即ち「見渡し可能（surveyable）な富¹⁶⁾」への莫大な支出を欠くわけにはいかなかった¹⁷⁾。中・小地主たちも、大地主でなければ維持できるはずのないほどの贅沢な生活様式を既に身に付けていた¹⁸⁾。生活様式の上昇に配慮せざるをえない状況は、中・小地主たちにもおよんでいた¹⁹⁾。貴族たちが宮廷を理想とし、地主たちは貴族たちを理想とした如く、新参地主たちはジェントルマンへの接近・同化を至上の理想として仰いだ²⁰⁾。そんなことから、ジェントルマンの概念は、一定の生活水準という点においてもあやふやとなった。「育ちの良さ」は親の経済力でもあるので、教養や広い意味での教育に表れる経済力も、地位を決定するようになる。

教養・教育や生活様式の点で国際人と呼ばれるに相応しいことを誇示すべく、美術の分野においてまたジェントルマンの立ち振る舞いにおいて如何なる規則（rule）を造り上げるべきか、議論された。それをリードしたのが、重商制成功者の哲人第三代シャフツベリー伯である。彼は芸術に道徳的弁明を加え、美と善は同一であると説

く、続いてポープは、金の正しい使い方を説き、富の価値は「自然」と結び付いた「徳」によって決定されるべきだ²¹⁾と主張する。古典的な芸術に関する知識は教養人の素養であり、その基礎がしっかりしていることが、英国ジェントルマンたる者の教養の一部であるべきだ²²⁾と考えられた。また、テイストを解する人(Persons of Taste)あるいはジェントルマン(Gentleman of Taste)と認められることは、上流社会においてその人を有利なあるいは優越した立場におくものであった²³⁾。

バーリントン伯たちは、グランド・ツアーに出かけてはラテン民族に対して劣等感を抱き、受け継いできた文化の英国性を無視しあるいは過少評価し、英国の採るべき文化の国際性を重視した²⁴⁾。彼らは、規範性と普遍的な妥当性を目指して伝統的に愛好してきた古典主義的な世界観に内面的な感動を覚え、同じ感動に駆られた小さなグループ、すなわち重商制成功者による上流階級を形成する。そして、成した富の一部をヴィラやカントリー・ハウス等の建築へと振り向ける。バーリントン伯等パラディアン陣営は、バロック建築がステュアート王朝復活という意味の反革命およびカトリック復活という意味の反宗教改革を連想させるというので、ヴェネツィア商業貴族たちの愛好したパラディオ設計の古典的な建築様式を選択することをもって教養度の同一を図ると共に、知力・財力(教養・生活様式)の実力を示す。彼らは、それによって彼の世界の誰よりも自分がすぐれてジェントルマン的であることを知り、仲間の他の上流指向者たちから暗黙の認証を得て、自分がジェントルマンであることを確信するのである。こうして、パラディアン・テイストは、彼らのステイタス・シンボルとなっていた。

一方、自由貿易論者たちは、重商制成功者や重商主義国スペインに対抗して、新しい世界への冒険的な進出の機会を伺っていた。彼らは、エドワード王たちの時代(1272—1377)・チューダー時代(1485—1603)に国籍が認識されて以来、英国の庶民を特徴づけてきた個別主義的な気質²⁵⁾、即ち列強と戦うための愛国的感情を沸き上がらせる。ジェントルマンへの階級上昇願望をも強く抱いていた彼らは、パラディアン陣営が掲げていた反ロココ的、合理的道徳

的風潮を受容する一方で、貿易の自由や英国の独自性ないし個別性を目指した、古代ギリシア・ローマ主義とは異なる barbarous ないしゴシック(Gothick)主義的な世界観に内面的な感動を覚え、同じ感動に駆られたグループを構成する。そして、英国に向かう好古的関心を強める等、文化の英国性を重んじることをもって教養度を同一とする。営んでいた事業に成功して経済力を身に付けていた商人や政府官職、軍人等の専門職(profession)の人たちは、自分たちより一段上の社会的身分にある古くからのジェントルマンの思考・行動様式に追従し準えることにより、「われわれもジェントルマンである」と自らが所属する同じ世界の有力者たちに対して主張し²⁶⁾、仲間の暗黙の同意を得る。そこでは、パラディオ主義とゴシックおよびロココとゴシックをそれぞれ織り交ぜて出来たパラディオ風/ロココ風のゴシック・テイストが、この時代に新たにジェントルマンへの階級上昇願望を成就させていった自由貿易論者たちのステイタス・シンボルとなった。

以上、重商制成功者と自由貿易論者について見てきた英国特有の上流指向の心理状態は、称賛と揶揄ないし少々の軽蔑も含めて、「粋な見栄(snobbery)あるいは上流気取り」と言われているが、この心理状態が英国近世の経済的繁栄の原動力の一つともなったことは否定できないであろう。その行為は美化され、正当化されて、R・H・トーニーも言う如く、富というものの従来の社会的な悪徳の経済的美徳への、ひいては道徳的美徳への転化²⁷⁾となっている。

4. 自由貿易論者による、反ロココ的、合理的道徳的風潮の受容

ストウ園の庭園建築物——コバム子爵

1733年、政治活動を断念したコバム子爵は、ストウ園の改良に着手する²⁸⁾。「英国の偉人たちの神殿, the Temple of the British Worthies, 1733—35」(図—1)、「古代の道徳の神殿, the Temple of Ancient Virtue, 1733—35」および「現代の道徳の神殿, the Temple of Modern Virtue, c. 1737」(図—2)が建設される。設計者は、ともにウィリアム・ケントである。コバム子爵は、以前にパラディオ主義陣営の総帥であるバーリントン伯からその被保護者であるケントを紹介されていたが、この年に彼を招聘している。それらの神殿は、建築主の社会的イデオロギ―を図像的に宣明するという機能を備えており²⁹⁾、パラディオ風ゴシックによる庭園建築物の発展・展開に影響を与えたことで極めて重要な役割を果たしている、ここで取りあげる。

「英国の偉人たちの神殿」には、16人の偉人³⁰⁾の胸像が祀られている。うち8人は、「大改革」主義を象徴するGibbs Building³¹⁾に祀られた後にこの神殿に移された。残り(註30)の斜体文字)が、この神殿の新築に際して新たに加えられたもので、アイコンとして重要であるので、クラークとハッセイの説明を次に紹介する。新参の1人がパラディオ主義の父イニゴ・ジョーンズである。サー・ロバートの政治に異を唱える反対派のバーリントン伯は、ホイッグの理想を表すべく、イニゴが英国に紹介した建築様式を採用した。それゆえ、彼はその中に加えられた³²⁾。残りの7人は、反対派のイデオロギ―の或る特定の一部を主張している。例えば、グレンシャム卿は、「商人という名誉ある専門職(profession)」およびシティ(首相サー・ロバートに反対する勢力)の利益を象徴する³³⁾。ジョン・バ

図—1 英国の偉人たちの神殿 ウィリアム・ケント 1733—35

図—2 現代の道德の神殿 ウィリアム・ケント C. 1737

ーナードは、有害で不正な株式取引に断固として反対し、国債の利子率を引き下げて国力を増大させるべく最大の努力をした³⁴⁾。そしてポウプは、悪徳を懲らしめるべく辛辣な機知をもってし、人間性の一たる徳を称揚すべく詩の雄弁性をもってした³⁵⁾。ポウプは、バーリントン伯へ富の効用について、1731 およびコバム子爵へ人間の知識と性格について、1733 という書簡詩を送って道德性を説き、金満家サー・ロバート等がくだらないことに金を浪費していることを風刺し、バーリントン等上流階級に金の正しい使い方を教えた。

「古代の道德の神殿」は、4人のギリシアの偉人を最も純粋な規範たる古代の道德³⁶⁾のアイコンとして祀っている。伝統的に統治の理想とされていたものが、サー・ロバートの行政府の墮落と対比されている³⁷⁾。その神殿は、理想の人物の墓を意味している³⁸⁾。即ち、サー・ロバートの行政府は死んでいると諷刺されている。「現代の道德の神殿」はこれらの二つの神殿近くに配置されていて、廃墟となった建築物と古い彫像は「現代の道德」が粉々に打ち砕かれた状態になっていることを人々に示さんと意図して作られている³⁹⁾。首のない彫像がサー・ロバートであることは明らかであろう。

それら神殿の図像的テーマの題材と表現形式は次の通りである。題材として取り上げられている内容の一つは、サー・ロバート等金満家による、贅沢な饗宴などくだらないことへの富の浪費と、第三代バーリントン伯等パラディオ主義を奉ずる反対派ホイッグの「ジェントルマン」たちが理想とする道德的な生活様式、即ち社会的悪徳としての富の、自然と結びついたパラディオ主義建築や自然主義風景式庭園等への転化と対比されていることである。もう一つは、サー・ロバート内閣の、野心的な事業（自由貿易）に対する抑制政策、および南海の泡沫事件に関わる不正な株式売買や国債の利子率を不当に高く維持する等の放漫政策と、コバム子爵等の公正で自由な商業取引促進の主張とが対比されている。そして、それらを表現する形式として、古代の道德のアイコンたるギリシアの偉人たちの彫像やイニゴ・ジョーンズや反対派の利益の或る部分を主張する人々の胸像、更には廃墟となった神殿と首のない彫像等の庭園建築物が用いられている。その底意は、富の正しい用法は、趣味の根本は良識にあるからして、「自然」と結び付いた徳、即ち反ロココ的、合理的道德的風潮を宣明するパラディオ主義建築や自然主義の風景式庭園などの「見渡し可能な富」の美の受容にあり、またサー・ロバートの政府は反対派との協調を図って商業と帝国の利益にそって統治すべきである、というものである。以上からコバム子爵は、反対派＝自由貿易論者に鞍替えしたけれども、同盟したバーリントン伯

一派の「ジェントルマン」としての生活様式たるパラディオ主義の価値観を受容した新しい「ジェントルマン」階層を形成したいと考えていたことが分かる。

5. 反ロココ的、合理的道德的風潮と英国性・国際性の綱交ぜ

(1) エッシャーの家——ヘンリー・ペラム

a. パラディオ風ゴシック

ヘンリー・ペラムは、後述するジェームズ・ドーマー、ウィリアム・スタナップ等と同様に、ホイッグ系大地主の出自とは言えど非長子（次・三男）であったので、爵位や財産を相続できなかった。それゆえ、彼は、官職という専門職の地位を金と縁故関係によって親に買ってもらい大蔵官僚の地位にまでのぼりつめていた。彼は、ジェントルマン階級への新規参入を果たすべく、土地ブームにあった1729年、エッシャー・プレイスに土地を購入する。彼は、サー・ロバートの政策に強い反対をしていたが、ホイッグ党内の反対派（農業以外の利害集団）との協調ないし緊密な同盟を重んじていたので、反対派の自由貿易論者の barbarous ないしゴシック主義的な世界観を持っていながらも、ホイッグ系「ジェントルマン」としての生活様式を維持し、その価値観を引き継いでいたのはもちろんである。

ペラムは、ゴシックによるヴィラの設計をウィリアム・ケントに依頼する。それが、敷地内に廃墟となつて残っている初期チューダー様式による赤煉瓦造のゲイトハウスを改装しその両翼にウィングを増設して造った、パラディオ風/ロココ風の様相を呈したゴシックによるヴィラ、「エッシャーの家、1729-39」（図—3）である。その意匠的な特徴として、他と区別するべくその頂部にアテックのような屋根を設えられた二つの塔、あるいは他と違って見えるようにその頂部にパディメント状のパラペット等を帽子のようにかぶせた張り出し窓およびポーチ等に、バーリントン伯が特別な感情を抱いていた、意匠的構成要素の分離、即ちスタッカート式とも呼ばれている過度の分節化⁴⁰⁾という建築手法を見て取ることができる。更には、塔、翼、張り出し窓、ポーチ、尖りアーチ付きの開口部、三つ葉飾りや四つ葉飾りを象った窓等の建築意匠の要素が、パラディオやジョーンズが用いたあるいは推奨した古典的な建築の規則にしたがって、それぞれに異なったヴォリュームを考慮して、左右対称に正しく配置されていることも挙げられる。

英国のパラディオ主義（Palladian）建築は、18世紀のはじめ、英国経済が衰退し始めたと考えた重商制成功者たちによって創られ

図—3 エッシャーの家 ウィリアム・ケント 1729-37

た簡素な様式であり、その建築の目的は、重商制貴族社会を、16 世紀半ば以降のヴェネツィア共和国や帝政初期ローマのアウグストゥス時代のような、ホイッグが理想とする社会とし、それを安全に維持・継続させるためのシンボルとして役立たせるためであった。大陸のカトリック諸国で流行した豪華で人工的なフランス・ロココ⁴¹⁾の装飾に対して、カトリックの反宗教改革(the Catholic Counter-Reformation) および反名誉革命に恐れを抱く英国では、フランスをはじめとするカトリック諸国と宗教的・政治的・経済的に対立していたこともあって、フランスによる世界制覇を想起させるバロック芸術と、それに結びあうロココ芸術は敬遠され、自然の建築である⁴²⁾ パラディオ風様式を好む傾向が強くなっていた。同じく普遍的ではあったが、経済が上り坂にあった 17 世紀の終わりから 18 世紀の初期にかけての重商制成功者たちが愛好した英国バロック建築や、同じく上り坂の経済にあった自由貿易論者たちの好んだロココ建築を、経済が停滞状態にあったホイッグ系大地主の二代目ないし三代目の人々が厭わしく思い採用しなかったのも無理からぬことであった。このことは別稿にて詳細に検討しよう。

先述の第 3 の階層にあった自由貿易論者たちは、邸宅を建設するための土地を購入してジェントリ(地主)層への階級上昇を果たして新たにジェントルマンの第 2 の階層に吸収される栄誉を獲得せんとする。そして更に、彼らは、第 1 の階層である伝統的な大地主で支配階級となっていたホイッグ系「ジェントルマン」階級の人々の上流社会への仲間入りを目指して社会的な序列の階段を着々と昇る努力をする。したがって、自由貿易論者たちは、商圏の海外への拡大、即ち植民地獲得のための闘争心を昂揚させるための象徴としてゴシックを愛好する傍ら、連続的な変化として、第 1 の階層の重商制成功者たちとジェントルマン文化を共有することを重んじたので、建築もゴシックをベースにパラディオ主義を接ぎ木するという段階的・連続的な変化を工夫したのである。重商制成功者から自由貿易論者の間の社会的な序列の連続的な変化、およびその事実に伴って起こってくるパラディオ主義からゴシックまでの建築文化の連続的な変化が、パラディオ風ゴシックを産んだと言ってもよいであろう。

b. ロココ風ゴシック

「エッシャーの家」のもう一つの意匠的な特徴として、うねった曲線や渦巻き形状に対する好みが見られる。二つの塔の屋根に見られる葱花曲線(ogee)アーチ、窓まぐさを内弧と外弧が共に上部に折れ曲がった葱花曲線による尖りアーチで飾った窓、およびその上部のチューダー様式の平べったい雨垂れ石が、ロココの装飾手法によって姿・形状・性質を自由奔放に変化・融合され造形されて一対となった開口部の装飾、四つ葉飾りを象った窓等に、見て取れる。

18 世紀前半に活躍した哲学者デイヴィッド・ヒュームによる Association の概念を用いて、葱花曲線に見られるうねった曲線や渦巻き形状に対する好みについて検討してみよう。

ペラムは、同じ自由貿易論を主張する仲間の人々に、ロココ風ゴシックを用いて改装したヴィラの「エッシャーの家」を見せる。それを見た人々に、かつて 14 世紀において事業に成功した新興都市商人たちの田舎における隠遁生活の成就の象徴となっていたマナー・ハウスを想起させる。14 世紀新興都市商人たちが野心的・冒険的な事業を成功させたと同様に、ペラム自身も財務官という官職を勝ち得て、「第三代シャフツベリー伯流」に実業の世界からの隠

遁を気取って田舎における隠遁生活を始めることによって、自分の知力・財力(教養・消費生活様式)の実力を示そうと図る。ペラムは、「エッシャーの家」を見て中世のマナー・ハウスを想起した仲間の人々をして、自身が同じ自由貿易論者の誰よりもすぐれてジェントルマンであるという方向に連想を馳せさせんとする。そして、それを、同じ世界の他の上流志向者たちから暗黙に認証してもらう。その結果、彼は自らがジェントルマンへの階級上昇願望を成就したことを確信するのである。教養あるペラムは、この物語を語るべくロココ風ゴシックによる「エッシャーの家」の建設を意図したと考えられる。

葱花曲線に見られるうねった曲線や渦巻き形状に対する好みは、事実上英国の伝統に根ざしたもので、1300 年の様式、つまり装飾式ゴシック(1290-1375)様式から、18 世紀の画家ホガース、詩人銅版画家のブレイク、さらにそれ以後までの流れであると言われている⁴³⁾。装飾式ゴシック様式が流行したのは、エドワード諸王の治世(1272-1377)であり、英国が未加工の羊毛の大量輸出から始め、毛織物の輸出に転じ国際的な競争力を身につけた時代であった。商工業が発達し、中産商工階級も急激に台頭した。成長を続けていた重商主義的な英国経済の下、14 世紀半ば頃に建築された装飾式ゴシックによるマナー・ハウスの多く、例えばペンズハースト(Penshurst Place)は、しばしば、毛織物に関連した事業に成功した新興都市商人たちの田舎における隠遁生活の場となった⁴⁴⁾。つまり、装飾式ゴシックを、ジェントリ(地主)層に参入した証として、また新興都市商人の上流志向者(snob)たちのステイタス・シンボルであったと見做したとしても、妥当であろう。その指摘は、ロココ風ゴシックが、それを見る人の胸中に 14 世紀英国の新興都市商人たちの「ジェントルマン」への階級上昇という心弾む連想を促すに格好な様式であったとする、われわれの考えの妥当性ないし正当性を証明するためのよき資料となっている。

ペラムは、初期チューダー時代の赤煉瓦造のゲイトハウスを改造して創った「エッシャーの家」を見た自由貿易論者に、チューダー時の初期、貴族に反対して商業貿易を奨励する国王に心底味方した中産商業市民層の多数が事業に成功して、新たに貴族層へと参入していった事実を想起させる。そして、自由貿易論者をして、中産商業市民層がかつてそうであったように、ペラム自身も同じ反対派の誰よりもすぐれて「ジェントルマン」であるという方向へ連想を馳せさせる。その結果、自由貿易論者の上流志向者の暗黙の認証を得たものと考えられる。ペラムが設計者のケントに対し、敷地内に廃墟となつて残っている初期チューダー時代の赤煉瓦造のゲイトハウスの積極的な活用、およびその近隣のハンプトンコートにおいてケントが携わっていた「アン・プリンのゲイトの再建計画、1732」と同様な方針で意匠することを設計条件として要請している⁴⁵⁾。事実は、人の心中に機能する Association の働きによってゴシックが「ジェントルマン」への階級上昇と常に結合している、というわれわれの論を補強してくれる。なぜなら、煉瓦造は 14 世紀に英国に導入され、初期チューダー時代には赤煉瓦造が貴族層への階級上昇に成功した商人たちのゴシックによる大邸宅にも用いられていたことが知られていたもので、廃墟となつて残っていた赤煉瓦造のゲイトハウス、およびその当時に階級上昇を成就させた商人たちの大邸宅の様式を採用して造った赤煉瓦造のハンプトン・コートは、ペラム

等新参地主たちの胸に、そこに住んでいた人々の「ジェントルマン」への階級上昇の成就等、生き生きとした快い回想の感動を呼び起こすものであったからである。

ウィリアム・ケントは、造園家として活躍した一方で、建築家として自然主義の風景式庭園に用いられていた原理を建築設計へも応用する。即ち、英国の伝統である装飾式ゴシックと、当時先進大陸諸国で流行していたロココの自然で自由なサーペンタイン曲線や渦巻き型形状を織り交ぜにし、反古典的でしかも英国的特質と国際的特質を併せ持ったロココ風ゴシック (Rococo Gothick) を創造する。「《中世の》ゴシックに相当する脆弱で装飾的な形式を発展させたのはケントであることは、疑う余地はない。・・・ケントのゴシックは 18 世紀の中葉ドーヴァー海峡の向こう側から、パラディオ主義が盛んであった英国に時折旋風のごとき影響を与えたロココに幾分類似した自由性を恣にしていた⁴⁶⁾」とサマーソンは評している。それは、ケントのゴシックが、中世のゴシックとロココを織り交ぜた新しい装飾的な形式であるという考えの妥当性を補強してくれるものである。

そこで注目すべきは、自由貿易論者の建築主のパラムの設計要求に答えたケントが、舶来品のフランス・ロココを取り入れゴシックと織り交ぜる際に採った政治的・経済的・社会的ならびに建築的な手法である。

ロココ様式 (genre rocaille) は、バロック末期のフランスで、バロックの線と動きを借り受けて、それにもう一捻りを加えることによって創られた奢侈的な様式である。欧州大陸では 18 世紀のごく初期の頃から中葉にかけて、フランスの宮廷をはじめとする上流社会の人々に愛好されていた最新式の高貴な趣味であり、また経済が繁栄しバロック式の建築が盛んであったイタリア、南ドイツ、オーストリア、スペイン等のローマ・カトリック諸国で、それは流行していた。ロココは英国人にとっては、反古典的でしかも、パラディオ主義と同様にあるいはそれ以上に国際性豊かであり、舶来文化の香りも高く高級感を備えている。高価な材料をふんだんに使用し、金びかで豪華な、そして熟練度の高いクラフトマンの労苦が過剰でさえあるほどに込められていて、装飾が複雑で込み入っているので、ロココは贅沢で高価であることを意味していた⁴⁷⁾。それゆえ、中産層のシティの商人や金融資本家等——自由貿易を旗印にして、対外的にすこぶる野心的・冒険的な活動を要求する立場にあり、この立場が 17 世紀末から 18 世紀初頭にかけて英国を国際的に活動させ、しかもその目的をある程度達していた——の上流志向者が知力と財力 (教養と生活様式) を誇示すべく、見栄やなぐさみあるいは見せびらかしから生まれてくる「奢侈的な消費」、更には「見渡し可能な富」への支出好きに叶う様式として、また競って富ないし財力を誇示する道具立ての一つとして、更には、国際的だが、規範性に縛られ、他のスタイルを織り交ぜ新しい豊かな装飾様式を創造する自由が許されない古典的なパラディオ主義を揶揄する様式として、ロココは誠に都合のよい様式であった。

ジョン・ロックは言う。流行品はステイタス・シンボルであったがゆえに、「価格が高いほうがよく売れる⁴⁸⁾」と。続けて「国産品」が国民の愛好物になることはめったにない⁴⁹⁾と指摘する。「妥当な価格で販売に供せられたわが国のいくつかの商品が軽蔑されてきたのに、その同じ物がフランス製として二倍の価格として売られる

図-4 水車小屋の神殿 ウィリアム・ケント c. 1737

時には、競って求めら、見せびらかされる。珍品や外国品を誇示し得たとき、人々は裕福な暮らしをしていると考えられたり、言われたりする。それでこそ、輸入品は競って富を誇示する道具立ての一つになり得るのだ⁵⁰⁾と、ジェントルマン階級の人々あるいはそこへの参入に努める人々の舶来品崇拜熱を指摘する。

自由貿易論者の上流指向者にとっても、ロココは、パラディオ主義を採る重商制成功者から受容していた反ロココ的、合理的道徳的な風潮のゆえに、その反フランス意識とも相容れることのない好ましからざるテイストでもあった。

ロココの好ましからざるテイストとしての部分をそぎ落とし、ロココの自由性・国際性・舶来品の高級観等のゆえに好ましい趣味としての部分を強調して、新しいロココのテイストを創り上げんとする試みがなされる。即ち、建築的には、英国生まれの樹木、即ちゴシックという代々受け継いできた英国性に、外国の若芽、つまり舶来品のロココという国際性を接ぎ木しあるいは織り交ぜ、言い換えるとロココの人工性を自然なものに置き換えるという手続きを採ることによって、自然な建築としてのロココ風ゴシック (Rococo Gothick) が創り上げられたのである。次に示すクリストファー・ハッセイならびにホレス・ウォルポールの言葉は、われわれの考えが妥当であることを裏付け且つ補強してくれるので、紹介しよう。即ち、ハッセイは、ロココ風ゴシックが形成されていったこのような動きを「ロココ精神の自然化ないし帰化⁵¹⁾」と呼び、「流行のフランス式装飾として取り入れられたもの《ロココ》は、『自然の事ども (things of natural kind) ⁵²⁾』と第三代シャフツベリー伯が呼んだものに対する、沸き上がりつつあった熱狂と融合するようになった。このロココの精神の自然化ないし帰化の過程は三種あり、・・・一つは自然の建築、即ち『ゴシック (Gothick)』建築の関心の高まりである⁵³⁾と指摘している。また、ホレス・ウォルポールが「エッシャーの家」のロココ風ゴシックによる建築意匠について、「そこでは、パラムの愛好を得るべくケントと自然が競い合った。そこにはケントらしさが溢れている⁵⁴⁾」と評している言葉は、ケントのロココ風ゴシックが自然な建築であると考えられていたことをよく示している。

(2) 水車小屋の神殿 —— ジェイムズ・ドーマー

ジェイムズ・ドーマーも非長男であったので、家を後にして軍人となっていた。彼は、バーリントン伯と親密な友人の一人である。

彼は兄の死によって、1737 年ラウシャムの所領を相続する。彼は、かつてブリッジマンが設計した庭園の線を柔らかにするべく、

ウィリアム・ケントに助言を求める⁵⁵⁾。そして、庭園の一部においてゴシックを用いた美的改良が開始される。住宅の北北西の方向にある「Temple of Echo」あるいはアポロの像の前から、ラウシャムの所領の境界を流れるチャーウェル川に沿って北の方角を望むと、バイスターからエンストンへ向かう道路のその渡河地点に 13 世紀末期に架けられたヘイフォード橋が見える。その橋の遙か右手、川の右岸に広がる農地に、ロココ風ゴシックによる「水車小屋の神殿, the Temple of the Mill, 1737」(図-4)が建築される。設計は、これもパラディアン陣営の建築家ケントである。四つ葉飾り式窓、装飾的に用いられた飛空え等の意匠的な特徴が挙げられる。特筆すべきは、サッシュ窓の窓まぐさの部分のアーチに見られる葱花曲線(ogee)あるいは二重曲線の応用である。

(3) レイビー城のゴシックによる改築——バーナード卿

レイビー城は 12 世紀に建てられたゴシックの城である。バーナード卿は、1740 年代から 1788 年にかけて城を修復し、一続きの部屋をパラディオ風/ロココ風ゴシックで装飾している。その一連の改修工事で、その猟園に隠遁所と湯殿(retreat and bath-house)が建設され、両方のウィングにアーケードが施された「ゴシック(Gothick)のパヴィリオン」(図-5)が設計されている。設計者はダニエル・ギャレットと言われている⁵⁶⁾。パラディオ主義の熱狂者の一人である、カーライル卿の義理の息子であるサー・トーマス・ロビンソンがチズウィック・ヴィラのダブル・フライトの入り口階段をモデルにして、キャッスル・ハワードの霊廟の台座部分を変更しようとした際に、ギャレットは設計の実行委員として働いた。その作品はバーリントン派の人々、主にサー・トーマス・ロビンソンによって合意されている。それゆえギャレットは、ゴシックによる庭園建築物の設計において、ケントの直接的な継承者であると言われている⁵⁷⁾。

(4) アイスローブ・ハウスのゲイトウェイ——ハリントン伯

1733 年、ポーランド継承問題は欧州諸国を戦争に巻き込んだ。サー・ロバートはそれに関わらないよう平和政策を維持したが、ハリントン伯等ホイッグ党員は、彼の政策の分別に疑問を抱いた。1739 年、大ピットはスペインの領有する南米の植民地を奪い取るべく英匡議会にて主戦論を展開する⁵⁸⁾。サー・ロバートの政権の中核にいたニューカッスル公が戦争の必要性を確信すると、後にゴシックによる模倣の城、「ウィンポールの城, 1749」を建設する大法官のハードウィックおよび国務人臣のハリントン等は、それを支持し、英国の開戦をサー・ロバートに迫って⁵⁹⁾ 反対派に転じた。

図-5 ゴシックのパヴィリオン ダニエル・ギャレット c. 1752

図-6 アイスローブ・ハウスのゲイトウェイ アイザック・ウェア 1751

初代ハリントン伯、即ちウィリアム・スタナップは、パラディオ風/ロココ風ゴシックによる「アイスローブ・ハウスのゲイトウェイ, 1751」(図-6)を建設する。設計者はアイザック・ウェアであり、サー・トーマス・ロビンソンの仲間、つまりパラディアン陣営の一人である。その意匠的な特徴として、平面が四角形の塔とその頂部に設えられた胸壁を備えたパラペット、あるいは建物中央の入り口部分の頂部にあるペディメント状のパラペット等に、バーリントン伯が特別な感情を抱いていた過度の分節化という建築手法を見て取ることができる。

6. 結論

重商制成功者は、18 世紀はじめから中葉にかけて、重商制秩序の安全維持を図るべく、自由貿易論者の上流志向者を新たに「ジェントルマン」階級に吸収する等して彼らとの緊密な同盟を育て上げ、商業と帝国の利益にそって英国を支配した。各階層の社会的序列は、連続的にいくつも積み重なった階段状になっていて、上下の関係こそあれ階級闘争の如き敵対関係は起きなかった。建築の趣味の変化も、パラディオ主義からゴシック好みまで、支配形態と同様に連続的であった。上流志向者は、新しい世界への野心的・冒険的進出に燃えつつも、いわゆる「ジェントルマン」文化を共有することを至上の理想として仰いだので、パラディオ主義の反ロココ的、合理的道徳的風潮を受容し、パラディオ主義とゴシックを綯い交ぜ、パラディオ風ゴシックを創った。

最新式の高貴なテイストである二重曲線のフランス・ロココは、パラディオ主義を揶揄する様式であり、また事業を成功させ「ジェントルマン」階級への参入を図らんとする自由貿易論者の「見渡し可能(surveyable)な富」への支出好きに叶う様式であった。葱花曲線の装飾式ゴシックは、かつて成功した新興都市商人たちの「ジェントルマン」への階級上昇願望成就という心弾む連想を促す恰好な様式であった。上流志向者は、知力・財力の実力を示すべく、ロココの自由性・国際性と装飾式ゴシックの英国性を綯い交ぜ、新しいロココ風ゴシックを創った。

こうして、1733 年頃から 1753 年頃にかけてパラディオ風/ロココ風ゴシックは、「ジェントルマン」への階級上昇願望成就の証として、自由貿易論者の上流志向者のステイタス・シンボルとなった。

註記

(1) Alistair Rowan, *Gothick Restoration at Raby Castle*, Architectural History, Vol. 15, 1972, p. 23 および Michael McCarthy, *The Origins of Gothic Revival*, Yale University Press, 1987, p. 33 (2) *ibid.*

(3) John Summerson, *Architecture in Britain 1530-1830*, Penguin Books, 1953, p. 241

(4) James Stevens Curl, *Georgian Architecture*, David & Charles, 1993, p. 61 (5) Summerson, *op. cit.*, pp. 239-40

(6) Curl, *op. cit.*, p. 56 Curl は, Breman, P (ed) *The Architecture of the Early Eighteenth Century*, (London: Weinreb, 1965) Item 46 Catalogue 11 を紹介している。

(7) Terence Davis, *The Gothick Taste*, David & Charles, 1974, p. 45

(8) 参考文献を挙げる。Ph. デュ・ビュイ・ド・克蘭シャン 『スノビズム』 白水社, 横山訳, 1972

(9) G・M・トレヴェリアン 『イギリス社会史 2』 みすず書房, 松浦・今井訳, 1983, 259 頁

(10) H・J・ラスキ 『イギリス政治思想 II——ロックからベンサムまで』 岩波書店, 堀・飯坂訳, 1969, 72 頁・・・パークレイ司教は「大英帝国の衰退防止に関する試論」(1721) を出版し, 英国人の投機狂的性癖が, 高貴な道徳的性格に及ぼす影響を心配する。この性癖は南海泡末事件を齎した。

(11) 川北 稔 『工業化の歴史的前提——帝国とジェントルマン——』 岩波書店, 1985, 271 頁 (12) Bernard Denvir, *The Eighteenth Century Art, design and society, 1689-1789*, Longman, 1988, p. 16

(13) H・J・ハバカク 『18 世紀イギリスにおける農業問題』 未来社, 川北訳, 1967, 15-7 頁

(14) 村岡健次・鈴木利章・川北稔 『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』 ミネルヴァ書房, 1987, 121 頁 および ハバカク, 前掲書, 1 頁

(15) アーノルド・ハウザー 『芸術と文化の社会史 2』 平凡社, 1968, 611 頁

(16) surveyable という語は, 一望できる, 概観できる, 測量できる, も渡せる, 人の目に触れる, 目立つ等の意味がある。18 世紀の英国人たちの間には, その所有者の人格と社会的な身分を最も明確かつ強力に象徴するという意味での人の目に触れる富を富の基本的特性と見なす考えがあり, 「見渡し可能 (surveyable) な富」こそが富裕の本質と考えられた。それは, カントリー・ハウスや庭園建築物等, 永続性が高く社会的な意味が物的・空間的に明示され易い分野に集中する傾向の強い, 人の目に触れる資産を言う。

(17) Jonathan Richardson, *Essay on the Whole Art of Criticism as it relates to Painting and a Discourse on the Certainty, Pleasure, and Advantage of the Science of a Connoisseur*, 1715 (但し Denvir, *op. cit.*, p. 10 からの引用) (18) ハバカク, 前掲書, 28 頁 (19) 同書中

(20) 角山 栄・川北 稔 『路地裏の大英帝国 イギリス都市生活史』 平凡社, 1986, 20 頁

(21) Alexander Pope, *Epistles to Several Persons (Moral Essay) Epistle IV (To Burlington)*, *Argument of the Use of Riches*, Methuen, Edited, by, F. W. Bateson, 1951, pp. 130-51 および, *Epistle III (To Bathurst) Argument of the Use of Riches*, pp. 79-121

(22) C. Stigliano, *Il Cortegiano*, (但し Denvir, *op. cit.*, p. 10 からの引用)

(23) Richardson, *op. cit.*, (但し Denvir, *op. cit.*, p. 10 からの引用)

(24) John Steegman, *The Rule of Taste From George I to George IV*, Macmillan, 1936, p. 18 (25) *ibid.*, (26) 川北, 前掲書, 279 頁

(27) R・H・トーニー 『宗教と資本主義の興隆 下』 岩波書店, 山口・越智訳, 昭和 39 年 169 頁

(28) Miles Hadfield, *the English Landscape Garden*, Shire Publications, 1988, p. 29-32 および Christopher Hussey, *English Gardens and Landscape 1700-1750*, Country Life, 1967, p. 97 (以下 "Gardens" という)

(29) George Clarke, "Grecian Taste and Gothic Virtue: Lord Cobham's gardening programme and its iconography", *Appollo*, Vol. XCVII, No.

136, pp. 566-71, (June 1973)

(30) 向かって左側には, 詩人, 哲人, 芸術家等——8 人の沈思する人, 右側には 8 人の活動家——王政治家, 軍の指導者たちが並ぶ偉人たちは左から右へ, Pope, Gresham, Inigo Jones, Milton, Shakespeare, Locke, Newton, Bacon, Alfred, Edward Prince of Wales, Queen Elizabeth, William III, Raleigh, Drake, Hampden, Barnard

(31) ギブズは 1732 年以前にストウ園にこの神殿を建てている。G・ウェストはその年に書いた詩の中にその神殿について「ギブズよ, 汝の神殿の周りに, 皇太子, 愛国者, 詩人, 哲人から成る神聖な一団が立っている。」と歌っている。彼は, エリザベス女王, ベーコン, シェクスピア, ハンプデン, ウィリアム 3 世, ロック, ニュートン, およびミルトンの名を挙げている。George Clarke は, その神殿を Gibbs Building と呼んでいる。

(32) Clarke, *op. cit.*, 569

(33) *ibid.*

(34) Hussey, "Gardens" p. 102

(35) *ibid.*

(36) John Dixon Hunt, *Gardens and Picturesque*, MIT Press, 1992, pp. 79-80

(37) Clarke, *op. cit.*, pp. 568-569

(38) Hunt, *op. cit.*, pp. 59-60

(39) Clarke, *op. cit.*, p. 569

(40) Rudolf Wittkower, *Palladio and English Palladianism*, Thames and Hudson, 1974, p. 132

(41) ニコラウス・ベウスナー 『英国美術の英国性』 岩崎美術社, 友部・蛭川訳, 1981 年, 39 頁, (以下 "英国美術" という)

(42) ニコラウス・ベウスナー 『新版ヨーロッパ建築序説』 朝国社

小林・山口, 竹本訳, 1989, 296 頁

(43) ベウスナー, "英国美術", 38-41 頁, T. W. West, *English Architecture*, Shire Publications, 1988, p. 25 および John Harries, *Churches*, Shire Publications, 1976, p. 20

(44) West, *op. cit.*, p. 27

(45) Hussey, *op. cit.*, p. 47

(46) Summerson, *op. cit.*, pp. 239-40

(47) Bernard Denvir, *The Late Victorian Art, design and society, 1852-1910*, Longman, 1986, p. 15

(48) ジョン・ロック 『貨幣・利子論』 東大出版, 田中・竹本訳, 1982 年, 90-91 頁 (49) 同書中 (50) 同書中, 90-91

(51) Christopher Hussey, *English Country House, Early Georgian 1715-1750*, Antique Collector's Club, 1984, p. 24 (以下 "House" という)

(52) Anthony Ashley Cooper, third Earl of Shaftesbury, *Characteristics of Men, Manners, Opinion, Times*, Olms Verlag 1711, Vol. II, Part 3, Sect. I p. 393 (53) Hussey, "House", p. 24

(54) Horace Walpole, *On Modern Gardening*, in the Works of Horace Walpole, Earl of Orford, printed for G. G. and J. Robinson MDCCXCVIII, Vol. II, p. 593

(55) David Watkin, *The English Vision*, John Murry, 1982, p. 25

(56) Rowan, *op. cit.*, p. 26 (57) McCarthy, *op. cit.*, p. 34

(58) アンドレ・モーロア 『英国史』 白水社, 水野・浅野訳, 昭和 15 年, 219 頁

(59) J. H. P. Lumb, *England in the Eighteenth Century*, Penguin Books, 1981, p. 72

図版

(図-1) および (図-4) は, David Watkin, *The English Vision*, John Murry, 1982, から, (図-2) は, George Clarke, *Grecian Taste and Gothic Virtue: Lord Cobham's gardening programme and its iconography*, *Appollo*, Vol. XCVII, No. 136, (June 1973) から, (図-3) は, Terence Davis, *The Gothick Taste*, David & Charles, 1974 から, (図-5) は, Alistair Rowan, *Gothick Restoration at Raby Castle*, Architectural History, Vol. 15, 1972 から, (図-6) は, Michael McCarthy, *The Origins of Gothic Revival*, Yale University Press, 1987 からの引用である。

(1998 年 1 月 21 日原稿受理, 1998 年 8 月 21 日採用決定)